

カイロの街角から—天理参考館の現代エジプト展—

天理参考館の現代エジプト展

2022年4月15日から6月6日まで、天理大学附属天理参考館では、第89回企画展「エジプト・カイロの大衆文化—1959年のタイムカプセル—」が開催された。エジプトは「中東」と呼ばれる地域に属しているが、アフリカ大陸の北部にも位置している。アフリカに関わる企画展は、天理参考館の企画展として初めてであった。

展示品の骨子を成すのは、エジプト研究者であった田中四郎 京都外国語大学名誉教授 (1921～2017) が、1959年にエジプト留学時に収集した資料群である。2021年春、筆者は、本企画展の担当者である梅谷昭範氏 (天理参考館学芸員) に声をかけられ、何度か企画展に展示予定の資料を拝見しながら、展示資料の整理に携わった。⁽¹⁾

天理参考館と田中四郎



田中四郎
(天理参考館蔵)

1957年9月21日、日本オリエント学会 関西大会が、天理大学を会場に開催された。同学会の関西での大会開催は天理大学が初めてであった。日本オリエント学会は、三笠宮 崇仁親王 (1915～2016) が提唱して1954年に設立した学会である。三笠宮は同学会の初代会長を務めたが、天理参考館の創設者である中山正善 2代真柱は、三笠宮と長らく親交がありオリエント学会創設に尽力したこと
で知られている。天理大学が大会開催校となったのも2人の交流が機縁であったことは間違いない。

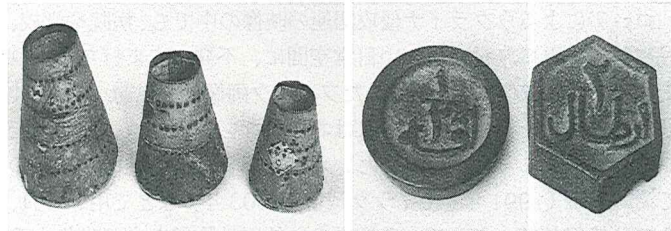
田中は天理大学での学会において、「アラビヤ語に於ける『神』の墮落」と題した講演を行った。この講演内容は、ムスリムの「もしアッラーが望み給わば」などの「アッラー」(神)に関わる言葉が、いかに日常生活で一時には使用者の都合よく一用いられているかについて考察したものであった。⁽²⁾

講演後、田中は2代真柱から声をかけられた。これが2人の最初の出会であった。この頃、田中はエジプト留学の機会をうかがっていた。第2次世界大戦後、日本は国交を回復したとはいえ、研究者の海外渡航は未だ困難であった。エジプトへ渡航できる日本人研究者の人数は限られており、先輩研究者の渡航を待っていると自分の留学は定年間近になってしまう。そこで、彼は当時のエジプト大統領であるガマル・アブドゥル・ナセル (Gamal Abdel Nasser, 1918-1970) にアラビア語で手紙を書き、留学の機会を与えるように直訴した。結果、田中は大統領の許可によってエジプト留学の許可が下り、1959年、田中はようやく念願のエジプト留学を果たした。

エジプト留学を目前にして、田中は2代真柱より、「エジプトの一般大衆が、日常使っている生活用品を、全部買い集めてきてほしい」という依頼を受けることになった。一般大衆の日用品を蒐集する視点は、まさに異文化伝道の参考資料を展示する天理参考館のコンセプトであった。

カイロの街角から

1年間の留学を終えて、田中は当時のエジプトで収集した多くの生活資料を持ち帰っている。貨幣から、人々の暮らしを支



計量用錘
(天理参考館蔵)

穀物計量枡
(天理参考館蔵)

えていた家畜に用いられた道具まで、実にさまざまであった。「田中コレクション」とでも言うべき収集品は、1959年のエジプト・カイロの暮らしが、いわば「タイムカプセル」のように閉じ込められている。

エジプトでは、国民の大多数がムスリムである。エジプト人が日常の暮らしのなかで用いており、田中が集めて帰ってきた資料群のなかには、イスラームの聖典クルアーンのなかで説かれている教えが溶け込んでいる。

クルアーンのなかには、枡や秤の喩えが用いられている。クルアーンによると、終末(審きの日)において、すべての人間は神に裁かれる。審きの対象となるのは、現世における各自の生活である。現世において、人間の行為は秤へそれぞれ積まれていく。つまり、善行の秤が重ければ天国へ、悪行の秤が重ければ地獄へ行くことになる。

われ(神)は審判の日のために、公正な秤を設ける。1人として仮令芥子一粒の重さであっても不当に扱われることはない。われはそれを(終末において計算に)持ち出す(クルアーン 21章 47節)。

またクルアーンでは、実際の分量をごまかすことが禁じられている。人に売るときは目方を少なくして売ることに対して、買うときには目方を多くして買うようなことがあってはならない。つまり、常に正直で他者に真摯に向き合うことが説かれている。

わたしの人びとよ、アッラーに仕えなさい。あなたがたには彼(アッラー)の外に神はないのである。今、主からの証が、あなたがたに下ったのだ。だからきちんと寸法をとり、目方を量り、人を誤魔化してはならない(クルアーン 7章 85節)。

今日の日本では、重さを計るのにデジタル体重計やデジタルスケールを用いることが多くなった。しかしながら、今日のカイロの街角では、あいかわらず野菜や果物は秤と錘を使って売る光景が見られる。街の風景は少しずつ変化しているものの、田中が見た1969年の街並みの面影は今もカイロにある。

[註]
クルアーンの邦訳に関しては、『日亜対訳 聖クルアーン』(日本ムスリム協会)を参照した。

- (1) 筆者が携わったのは、アラビア語の読解やイスラームに関わる部分のみであった。膨大な資料群を丹念に整理し、「世相」「生業」「日常」「服飾」「娯楽」「信仰」の6つのコンセプトから陳列された梅谷氏の尽力に敬意を表したい。
- (2) 田中四郎「アラビヤ語に於ける『神』の墮落」『日本オリエント学会月報』1巻10号、1958年、pp. 112～118。
- (3) 田中四郎「ピラミッドがほしかった」『みちのとも』(1968年2月号)、pp. 167～168。